様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：６２５０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３１８４

研究課題名（和文）戦後の炭鉱における労働・労働災害史に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic Research on the History of Work and Industrial Accidents in Coal Mines in Postwar Japan

研究代表者
佐川　享平（Sagawa, Kyohei）

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・特任助教

研究者番号：３０７５６３７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、未整理資料「三菱高島礦業所端島炭坑関係資料」（以下、端島資料と略す）と「原田正純旧蔵三井三池炭鉱炭じん爆発事故患者関係資料」（以下、三池資料と略す）の調査・整理を基幹としたものであり、特に、「端島資料」を通じて炭鉱労働者の具体像を、「三池資料」を通じてCO中毒を追った事故被害者を取り巻く社会環境を、それぞれ検討し、戦後の炭鉱における労働災害と、炭鉱労働のあり方・環境を明らかにする研究を推進した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、いずれも未整理の個人所蔵資料であった端島資料と三池資料を分析対象とすることで、特定のイメージが先行する戦後炭鉱の歴史像に対して、労働と労働災害の側面から具体的な資料を基礎に迫るものであり、戦後における炭鉱労働の実態把握と歴史像の豊富化に寄与した。また、本研究が対象とした資料はいずれも未整理状態で保管されており、特に端島資料については相当程度、汚損が進行していた。応急的にではあるが、資料の保全を進め、整理を行ったことによって、本資料を用いて研究を推進するための基盤が整備され、今後の研究の進展にも寄与することになった。

研究成果の概要（英文）：This research is based on the investigation and organization of unorganized materials, “Materials Related to Hashima Coal Mine of Mitsubishi Takashima Mining Company” (abbreviated as “Hashima Materials”) and “Materials Related to Patients of Coal Dust Explosion Accident at Former Mitsui Miike Coal Mine of Masazumi Harada” (abbreviated as “Miike Materials”). Through the analysis of the “Hashima Island Materials” and the “Miike Materials,” we have promoted research to clarify the nature and environment of postwar coal mine labor and industrial accidents in coal mines.

研究分野：日本史

キーワード：日本史　炭鉱労働　炭鉱災害

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年、炭鉱のイメージや記憶にまつわる研究が盛んになっており、炭鉱や炭鉱労働者の過去像をめぐって、様々な言及がなされるようになった。しかし、炭鉱のイメージや記憶に対する研究や言及に歴史的事実に基づく裏付けを提供するべき歴史学の状況を省みると、炭鉱労働者に即した研究は極めて低調となっている。

確かに、特に戦後の炭鉱のあり方について、社会学を中心にして、中澤秀雄・島崎尚子編著『炭鉱と「日本の奇跡」――石炭の多面性を堀り直す』（青弓社、2018 年）など、炭鉱をフィールドにした新しい研究の試みがみられ、杉山伸也他編『日本石炭産業の衰退――戦後北海道における企業と地域』（慶應義塾大学出版会、2012 年）をはじめ、経済史の分野で経営史的研究が一定の成果を蓄積している。

だが、歴史学的な視点から、戦後の炭鉱労働者を主たる研究対象に据えた研究には大きな進展がない。とりわけ、戦後の炭鉱において重要な問題となる労働災害（事故や疾病）については、特定の事故に関する記録・証言集や、じん肺訴訟の弁護団の活動記録を除けば、研究の蓄積は乏しく、労働のあり方がもたらすところの労働災害、という視点から、戦後の炭鉱史を描くという試みは、ほとんどなされてこなかったといってよい。その要因として、歴史研究に利用し得る資料が極めて限られるという点に求められよう。

本研究は以上の認識と見通しに立ち、新たに存在が確認された貴重な未整理資料「三菱高島礦業所端島炭坑関係資料」（仮称・以下、「端島資料」と略す）と「原田正純旧蔵三井三池炭鉱炭じん爆発事故患者関係資料」（仮称・以下、「三池資料」と略す）の整理・調査・分析を通じて、戦後の日本炭鉱史を労働と労働災害の視座から把握すべく構想されたものである。

２．研究の目的

本研究における学術的な特色は、未整理のまま保管されてきた「端島資料」と「三池資料」の調査・整理を通じて、その全体像を明らかにするとともに、両資料の分析によって、炭鉱史研究における新局面の開拓を目指すところにあった。

「端島資料」は、「軍艦島」の通称で知られる三菱鉱業株式会社の高嶋礦業所端島炭坑（長崎県）の経営に関わる資料で、未整理のまま段ボール約 40 箱に収められ、その内容は、戦後期に関する資料がその大部分を占める。具体的には、月別に綴られた退職者名簿や勤休表の個票、従業員（鉱員）の納税記録簿、経営側と労働組合との折衝記録などが含まれており、労働者管理の実態と労働の具体像に迫りうる好個の素材といえる。なお、本資料は、過去数十年にわたって、一個人の懸命な努力によって維持されてきたものである。だが、劣化・汚損が進行しており、資料の保全を図りつつ、整理・活用への道を拓くこと自体にも、重要な学術的意義があると考えた。

「三池資料」は、三井三池炭鉱の炭じん爆発事故（1963 年）後、一酸化炭素（CO）中毒を罹患した患者を対象に行われた追跡調査と病状調査の記録であり、長期にわたって事故後の患者の姿を記録した希有な資料である。調査にも参加した医師・研究者の原田正純（2012 年没）が遺したものである。

本研究では、資本系統も性格も異なるこれら 2 つの資料を全面的に・整理・活用するにより、大小様々な規模の労働災害と、労働災害をもたらす労働のあり方・環境を多面的に分析することが可能になると考えた。

３．研究の方法

本研究は、以上の認識と見通しに立ち、以下 3 つの課題を設定し、4 ヶ年での取り組みと達成を期した。

・課題(1)：「端島資料」・「三池資料」の保全・整理・目録作成作業を行うこと。

・課題(2)：「端島資料」・「三池資料」の来歴・性格と関連する資料情報を調査・把握すること。

・課題(3)：「端島資料」・「三池資料」と関連資料の分析を通じて、戦後炭鉱史を、労働と労働災害の視座から再構成すること。

それぞれの課題は密接に関連し、課題(1)は、本研究計画の基盤をなす資料調査についての課題であり、課題(2)は、この課題(1)の成果をより十全なものとするために設定している。そして、課題(1)・(2)によって得られた成果を活かしつつ進められるのが、課題(3)であり、両資料に加えて、課題(2)で確認された関連資料をも分析の俎上にあげて、労働と労働災害の視座から、戦後炭鉱史を再構成する。

研究目的達成のため、本研究は〈基幹的研究〉と〈発展的研究〉とに大別する方法を採用し、4 ヶ年の計画を立て、その遂行に努めるものとした。〈基幹的研究〉は、上記の課題(1)・(2)に、〈発展的研究〉は課題(3)に、それぞれ該当する。このうち、〈基幹的研究〉ついては、課題(1)に初年度である 2 年度より最終年度までかけて取り組み、課題(2)には、3 年度より

着手する。そして、2〜3 年度の 2 ヶ年で課題(1)・(2)が、いずれも 7 割程度まで達成できるとの見込みのもと、〈発展的研究〉と位置付ける課題(3)については、4 年度を目途に着手するものとした。

４．研究成果

〈基幹的研究〉のうち、特に本研究の基盤をなす課題(1)には、初年度（2 年度）から最終年度（5 年度）まで、4 ヵ年にわたって取り組んだ。

研究代表者の勤務地から離れた場所で保管され、資料の分量も多い「端島資料」については、Covid-19 の流行によって、進捗に大きな影響を被った。現地に出張して調査を進める目処が立たなくなったため、所蔵者との合意のもと、3 年度の末に、全資料を一括して研究代表者の勤務地へ移送した。したがって、本格的な作業着手は、4 年度からとなった。また、「端島資料」については、汚損の進行が進んでいたため、資料の保全を最優先とし、被災資料のレスキューなどに用いられる無酸素パック（商品名モルデナイベ）を使い、応急的な防カビ・防虫処理を行った。そのうえで資料の整理に着手したが、作業着手の遅れに加え、課題(2)の過程で関連資料の存在が新たに確認されたため（後述）、資料のなかでも、比較的系統的にまとまって保存されていた「離職者名簿」を優先的に整理することとし、同時に、「離職者名簿」に記載された情報のデータ入力を進めた。入力を完了した離職者情報は約 2700 名分である。

一方、「三池資料」の整理作業はスムーズに進捗して、2 年度には目録を完成させることができた（計 98 件）。以降は資料の大半を占める CO 中毒患者及び関係者からの聞き取り記録の文字起こしに注力し、約 50 名分（文字数にして約 80 万文字）の文字起こしを完了した。

次に、課題(2)について、「端島資料」に関しては、所蔵者や関係者からの聞き取りを通じて、資料の来歴を確認した。なお、その過程で、本来、「端島資料」の一部であった資料が、福岡県直方市が所蔵する「筑豊文庫資料」（上野英信旧蔵資料）のなかに含まれていたことが判明した。これは、「筑豊文庫資料」が、長年、「端島資料」所蔵者の手元で一緒に保管されてきたことに起因し、直方市に「筑豊文庫資料」が寄贈された際、「端島資料」の一部が混入したためであるとみられる。したがって、「端島資料」の全容を把握するためには、「筑豊文庫資料」の調査も不可欠であることが確認されるに至った。

また、「三池資料」については、大牟田市立図書館所蔵の三池炭鉱関係資料を調査し、両者の関連性を確認した。

なお、課題(2)の過程で、炭鉱労働者に関する多くの記録文学（ルポルタージュ）作品を遺した上野英信が、炭鉱関係者から行った聞き取りを収めたオープンリールテープ（個人蔵）がみつかった。丹念な取材を基礎とした作品で知られる上野の資料であることから、本研究にも資するものと考え、所蔵者から借用のうえ、デジタルデータへの媒体変換と内容確認を行った。

〈発展的研究〉と位置づけた課題(3)については、課題(1)(2)の成果を踏まえながら着手した。「端島資料」については、「離職者名簿」の検討を通じて、1940〜50 年代の炭鉱労働者の属性（年齢・性別・前職・家族構成など）とその変化について分析を行った。

「三池資料」については、CO 中毒患者からの長期にわたって取り組まれた聞き取り記録の検討を通じて、先行研究で明らかにされてきた深刻な病状の継続のみならず、患者を取り巻く社会関係の具体的な様相とその推移に迫ることができた。ただし、「三池資料」と「端島資料」の両方を有機的に結びつけて分析するには至らなかった。

これらの調査・分析結果については、令和 7 年 1 月に、講演会（於国立歴史民俗博物館）という形で成果の一部を報告する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 佐川享平	４．巻 52
２．論文標題 戦前期の早稲田大学における鉱山実習とキャリア形成	５．発行年 2021年
３．雑誌名 早稲田大学史記要	６．最初と最後の頁 55-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関